

200838077A

平成20年度厚生労働科学研究費補助金

医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業

インフルエンザ様疾患罹患時の 異常行動の情報収集に関する研究

H20 - 医薬 - 指定 - 029

研究代表者

岡部 信彦

平成21(2009)年3月

平成20年度厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究
事業
インフルエンザ様疾患罹患時の異常行動の情報収集に関する研究
(H20-医薬-指定-029)

目次

I 総括報告	-----	1
岡部信彦	国立感染症研究所感染症情報センター	
II 分担報告		
1. 2007/2008 シーズンにおけるインフルエンザ様疾患罹患時の異常行動	-----	5
岡部信彦	国立感染症研究所感染症情報センター	
宮崎千明	福岡市立西部療育センター	
桃井真里子	自治医科大学小児科学	
谷口清州	国立感染症研究所感染症情報センター	
大日康史	国立感染症研究所感染症情報センター	
菅原民枝	国立感染症研究所感染症情報センター	
III 研究成果の刊行に関する一覧表		
IV 研究成果の刊行物・別刷		

I 総括報告

インフルエンザ様疾患罹患時の異常行動の情報収集に関する研究
総括報告書

岡部信彦

国立感染症研究所感染症情報センター

要約

目的: インフルエンザ様疾患罹患時に見られる異常な行動についての実態把握の必要があり、昨年度に引き続いて調査を行った。昨年度(2006/2007)は後向き調査であったが、今年度(2007/2008)は、前向き調査として実施している。

方法: 重度の異常な行動に関する調査(重度調査)の調査依頼対象はすべての医療機関において、2007/2008 シーズン行った。軽度の異常な行動に関する調査(軽度調査)はインフルエンザの定点医療機関において、2007/2008 シーズン行った。報告方法はインターネット又は FAX とした。

結果: 2007/2008 シーズンは、昨シーズンに比べ発生动向調査によるインフルエンザ様疾患患者報告数が少なかった。重度の異常行動は、平均 8 歳、男性に多く、発熱後 2 日以内の発現が多かった。薬剤服用の割合は、タミフルの服用は 31%、リレンザは 14%、アセトアミノフェンは 43% だった睡眠との関係は、眠りから覚めて直ぐに起こったものが多かった。昨シーズンと比べると、薬剤服用の割合に違いがみられたが、性別や異常行動の分類別の割合では殆ど違いは見られなかった。

分担研究者

宮崎千明 福岡市立西部療育センター

桃井真里子 自治医科大学小児科学

谷口清州 国立感染症研究所感染症情報
センター

大日康史 国立感染症研究所感染症情報
センター

(重度調査)として、調査依頼対象はすべての医療機関において、2007/2008 シーズン行った。

重度調査の報告対象は、インフルエンザ様疾患と診断され、かつ、重度の異常な行動※を示した患者(※飛び降り、急に走り出すなど、制止しなければ生命に影響が及ぶ可能性のある行動)で、報告方法はインターネット又は FAX とした。

A. 研究目的

インフルエンザ様疾患罹患時に見られる異常な行動が、医学的にも社会的にも問題になり、その背景に関する実態把握の必要があり、前向き調査を行った。

2 つ目は、軽度の異常な行動に関する調査(軽度調査)として、調査依頼対象は定点医療機関において、2007/2008 シーズン行った。

B. 材料と方法

研究は、大きく 2 つの方法で行った。

1 つは、重度の異常な行動に関する調査

インフルエンザに伴う異常な行動に関する報告基準は、インフルエンザ様疾患と診断され、かつ、異常な行動を示した患者とする。

インフルエンザ様疾患とは、臨床的特徴(上気道炎症状に加えて、突然の高熱、全身倦

怠感、頭痛、筋肉痛を伴うこと)を有しており、症状や所見からインフルエンザと疑われる者のうち、下記のいずれかに該当する者である。

次のすべての症状を満たす者①突然の発症、②高熱(38℃以上)、③上気道炎症状、④全身倦怠感等の全身症状

迅速診断キットで陽性であった者である。

分析は全数で集計の分析を行い、その後突然走り出す・飛び降りのみ、最後に軽度での単純集計を行う。

倫理的配慮

国立感染症研究所医学研究倫理審査を受け、承認されている(受付番号 173「インフルエンザ様疾患罹患時の異常行動の情報収集に関する研究」)。

C. 結果

2007/2008 シーズンは、昨シーズンに比べ発生動向調査によるインフルエンザ様疾患患者報告数が少なかった。昨シーズンに比べ、患者の年齢別にみると、0-4 歳、5-9 歳の割合が多かった。

重度の異常行動は、平均 8 歳、男性に多く、発熱後 2 日以内の発現が多かった。

薬剤服用の割合は、タミフルの服用は 31%、リレンザは 14%、アセトアミノフェンは 43%だった。10 歳以上は全てタミフル服用なしであった。睡眠との関係は、眠りから覚めて直ぐに起こったものが多かった。昨シーズンと比べると、薬剤服用の割合に違いがみられたが、性別や異常行動の分類別の割合では殆ど違いは見られなかった。

D. 考察

本内容は7月10日開催の安全調査委員会臨床ワーキンググループで報告された。

2008/2009 シーズンの前向き調査が既に始

まっている。今シーズンは重度の報告があれば随時、自動的に方向内容が関係者にメール送信される仕組みを実装しており、シーズン途中での情報収集、判断能力の向上に努めている。

E. 健康危険情報
特になし

F. 論文発表
特になし

G. 知的財産権の出願・登録状況
(予定を含む)
特になし

II 分担報告

平成 20 年度 厚生労働科学費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合
研究事業)

「インフルエンザ様疾患罹患時の異常行動の情報収集に関する研究」

分担報告書「2007/2008 シーズンにおけるインフルエンザ様疾患罹患時の異常行動」

岡部信彦	国立感染症研究所感染症情報センター
宮崎千明	福岡市立西部療育センター
桃井真里子	自治医科大学小児科学
谷口清州	国立感染症研究所感染症情報センター
大日康史	国立感染症研究所感染症情報センター
菅原民枝	国立感染症研究所感染症情報センター

要約

目的:インフルエンザ様疾患罹患時に見られる異常な行動についての実態把握の必要があり、昨年度に引き続いて調査を行った。昨年度(2006/2007)は後向き調査であったが、今年度(2007/2008)は、前向き調査として実施している。

方法:重度の異常な行動に関する調査(重度調査)の調査依頼対象はすべての医療機関において、2007/2008 シーズン行った。軽度の異常な行動に関する調査(軽度調査)はインフルエンザの定点医療機関において、2007/2008 シーズン行った。報告方法はインターネット又は FAX とした。

結果:2007/2008 シーズンは、昨シーズンに比べ発生动向調査によるインフルエンザ様疾患患者報告数が少なかった。重度の異常行動は、平均 8 歳、男性に多く、発熱後 2 日以内の発現が多かった。薬剤服用の割合は、タミフルの服用は 31%、リレンザは 14%、アセトアミノフェンは 43%だった睡眠との関係は、眠りから覚めて直ぐに起こったものが多かった。昨シーズンと比べると、薬剤服用の割合に違いがみられたが、性別や異常行動の分類別の割合では殆ど違いは見られなかった。

A. 研究目的

インフルエンザ様疾患罹患時に見られる異常な行動が、医学的にも社会的にも問題になり、その背景に関する実態把握の必要があり、昨年度に引き続いて調査を行った。

昨年度(2006/2007)は後向き調査であったが、今年度(2007/2008)は、前向き調査として実施している。

B. 材料と方法

◆調査概要

研究は、大きく 2 つの方法で行った。

1 つは、重度の異常な行動に関する調査(重度調査)として、調査依頼対象はすべての医療機関において、2007/2008 シーズン行った。

重度調査の報告対象は、インフルエンザ様疾患と診断され、かつ、重度の異常な行動※を示した患者(※飛び降り、急に走り出すなど、制止しなければ生命に影響が及ぶ可能性のある行動)で、報告方法はインターネット又は FAX とした。

2 つ目は、軽度の異常な行動に関する調査(軽度調査)として、調査依頼対象は定点医

療機関において、2007/2008 シーズン行った。

◆症例定義

インフルエンザに伴う異常な行動に関する報告基準(報告基準)は、インフルエンザ様疾患と診断され、かつ、重度の異常な行動を示した患者である。

インフルエンザ様疾患とは、臨床的特徴(上気道炎症状に加えて、突然の高熱、全身倦怠感、頭痛、筋肉痛を伴うこと)を有しており、症状や所見からインフルエンザと疑われる者のうち、下記のいずれかに該当する者である。

次のすべての症状を満たす者①突然の発症、②高熱(38℃以上)、③上気道炎症状、④全身倦怠感等の全身症状

迅速診断キットで陽性であった者

◆分析

分析は全数で集計の分析を行い、その後突然走り出す・飛び降りのみ、最後に軽度での単純集計を行った。

倫理的配慮

国立感染症研究所医学研究倫理審査を受け、承認されている(受付番号 173「インフルエンザ様疾患罹患時の異常行動の情報収集に関する研究」)。

C. 結果

本研究は、本研究【2007/2008 シーズン】について、2008年7月10日の厚生労働省臨床WGにて報告した。

図1・図2に2007/2008シーズンのインフルエンザ患者報告数(発生動向調査)について示した。図2は過去10年のうち、2006/2007シーズンと2007/2008シーズンのみのインフルエンザ患者報告数(発生動向調査)を抽出している。

図3に2006/2007シーズンと2007/2008シーズンの年齢別インフルエンザ患者報告数(発生動向調査)を示した。

図4に型別インフルエンザウイルス分離の検出報告数を示した。

分析対象データは、表1に示した。重度データのうち日時不明など該当外データを除外して77件であった。

図5に異常行動(重度)の発熱週と発生動向調査を示した。

図6に患者の年齢分布を示した。中央値は8歳であった。

図7に患者の年齢と性別を示した。図8・図9に、患者の年齢分布について、昨シーズン(2006/2007)と今シーズン(2007/2008)の比較を示した。中央値が、昨シーズン(2006/2007)は10歳、今シーズン(2007/2008)は8歳であった。

図10・図12に、今シーズン(2007/2008)異常行動(重度)発現者数とインフルエンザ患者報告数(発生動向調査)について示した。

図11・図12に、昨シーズン(2006/2007)異常行動(重度)発現者数とインフルエンザ患者報告数(発生動向調査)について示した。

図13に患者の性別を示した。

図14に患者の性別について、昨シーズン(2006/2007)と今シーズン(2007/2008)の比較を示した。

表2に、発熱から異常行動発現までの日数を示した。

図15に最高体温分布を示した。中央値は39.3度であった。

図16にインフルエンザ迅速診断キットの実施の有無を示した。

図17に迅速診断キットによる検査結果を示した。

図18に罹患前半半年間の予防接種歴を示した。

図19にタミフル(リン酸オセルタミビル)服用

の有無、図 20 にタミフル(リン酸オセルタミビル)服用の有無の昨シーズン(2006/2007)と今シーズン(2007/2008)の比較、図 21 にタミフル(リン酸オセルタミビル)服用の有無の性別、図 22 にタミフル(リン酸オセルタミビル)服用の有無の年齢別を示した。

図 23 にシンメトレル(塩酸アマンタジン)服用の有無、図 24 にシンメトレル(塩酸アマンタジン)服用の有無の昨シーズン(2006/2007)と今シーズン(2007/2008)の比較を示した。

図 25 にリレンザ(ザナミビル)使用の有無、図 24 にシリレンザ(ザナミビル)使用の有無の昨シーズン(2006/2007)と今シーズン(2007/2008)の比較を示した。

図 27 にアセトアミノフェン服用の有無、図 28 にアセトアミノフェン服用の有無の昨シーズン(2006/2007)と今シーズン(2007/2008)の比較を示した。

図 29 に異常行動と睡眠の関係、図 30 に異常行動と睡眠の関係の昨シーズン(2006/2007)と今シーズン(2007/2008)の比較を示した。

図 31 に異常行動の分類(複数回答)、図 32 に異常行動の分類(複数回答)の昨シーズン(2006/2007)と今シーズン(2007/2008)の比較を示した。

図 33 にタミフル有無と異常行動と睡眠の関係を示した。

次に、突然走り出す・飛び降りだけの分析とした。41 件であった。

図 34 に患者の年齢分布を示した。中央値は 7 であった。

図 35 患者の年齢分布について、昨シーズン(2006/2007)と今シーズン(2007/2008)の比較を示した。中央値が、昨シーズン(2006/2007)は 10 歳、今シーズン(2007/2008)は 7 歳であった。

図 36 に患者の性別を示した。

図 37 に患者の性別について、昨シーズン(2006/2007)と今シーズン(2007/2008)の比較を示した。

図 38 に最高体温分布を示した。中央値は 39.2 度であった。

図 39 にインフルエンザ迅速診断キットの実施の有無を示した。

図 40 に迅速診断キットによる検査結果を示した。

図 41 に罹患前半年間の予防接種歴を示した。

図 42 にタミフル(リン酸オセルタミビル)服用の有無、図 43 にタミフル(リン酸オセルタミビル)服用の有無の昨シーズン(2006/2007)と今シーズン(2007/2008)の比較、図 44 にタミフル(リン酸オセルタミビル)服用の有無の性別、図 45 にタミフル(リン酸オセルタミビル)服用の有無の年齢別を示した。

図 46 にシンメトレル(塩酸アマンタジン)服用の有無、図 47 にシンメトレル(塩酸アマンタジン)服用の有無の昨シーズン(2006/2007)と今シーズン(2007/2008)の比較を示した。

図 48 にリレンザ(ザナミビル)使用の有無、図 49 にシリレンザ(ザナミビル)使用の有無の昨シーズン(2006/2007)と今シーズン(2007/2008)の比較を示した。

図 50 にアセトアミノフェン服用の有無、図 51 にアセトアミノフェン服用の有無の昨シーズン(2006/2007)と今シーズン(2007/2008)の比較を示した。

図 52 に異常行動と睡眠の関係、図 53 に異常行動と睡眠の関係の昨シーズン(2006/2007)と今シーズン(2007/2008)の比較を示した。

図 54 にタミフル有無と異常行動と睡眠の関係を示した。

最後に、軽度の分析をおこなった。分析対象データは、表 3 に示した。軽度データのうち

日時不明など該当外データを除外して 520 件であった。

図 55 に異常行動(軽度)の発熱週と発生動向調査を示した。

図 56 に患者の年齢分布を示した。中央値は 6 であった。

図 57 に患者の性別を示した。

図 58 に最高体温分布を示した。中央値は 39.2 度であった。

図 59 にインフルエンザ迅速診断キットの実施の有無を示した。

図 60 に迅速診断キットによる検査結果を示した。

図 61 に罹患前半半年間の予防接種歴を示した。

図 62 にタミフル(リン酸オセルタミビル)服用の有無、図 63 にタミフル(リン酸オセルタミビル)服用の有無の性別、図 64 にタミフル(リン酸オセルタミビル)服用の有無の年齢別を示した。

図 65 にシンメトレル(塩酸アマンタジン)服用の有無を示した。

図 66 にリレンザ(ザナミビル)使用の有無を示した。

図 67 にアセトアミノフェン服用の有無を示した。

図 68 に異常行動と睡眠の関係を示した。

図 69 に異常行動の分類(複数回答)を示した。

図 70 にタミフル有無と異常行動と睡眠の関係を示した。

分析のまとめ

- 2007/2008 シーズンは、昨シーズンに比べ発生動向調査によるインフルエンザ様疾患患者報告数が少なかった。
 - 昨シーズンに比べ、患者の年齢別にみると、0-4 歳、5-9 歳の割合が多かった。

- 重度の異常行動は、平均 8 歳、男性に多く、発熱後 2 日以内の発現が多かった。
- 薬剤服用の割合は、タミフルの服用は 31%、リレンザは 14%、アセトアミノフェンは 43% だった。
 - 10 歳以上は全てタミフル服用なしだった。
- 睡眠との関係は、眠りから覚めて直ぐに起こったものが多かった。
- 昨シーズンと比べると、薬剤服用の割合に違いがみられたが、性別や異常行動の分類別の割合では殆ど違いは見られなかった。

D. 考察

本内容は 7 月 10 日開催の安全調査委員会臨床ワーキンググループで報告された。

2008/2009 シーズンの前向き調査が既に始まっている。今シーズンは重度の報告があれば随時、自動的に方向内容が関係者にメール送信される仕組みを実装しており、シーズン途中での情報収集、判断能力の向上に努めている。

E. 健康危険情報

特になし

F. 論文発表

特になし

G. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

特になし

表 1. 分析対象データ(重度)

報告数	674			
重度	88	除外	対象	
	日時不明	8	11	77
	高齢者(31歳以上)	3		
軽度	532			
不明	54			

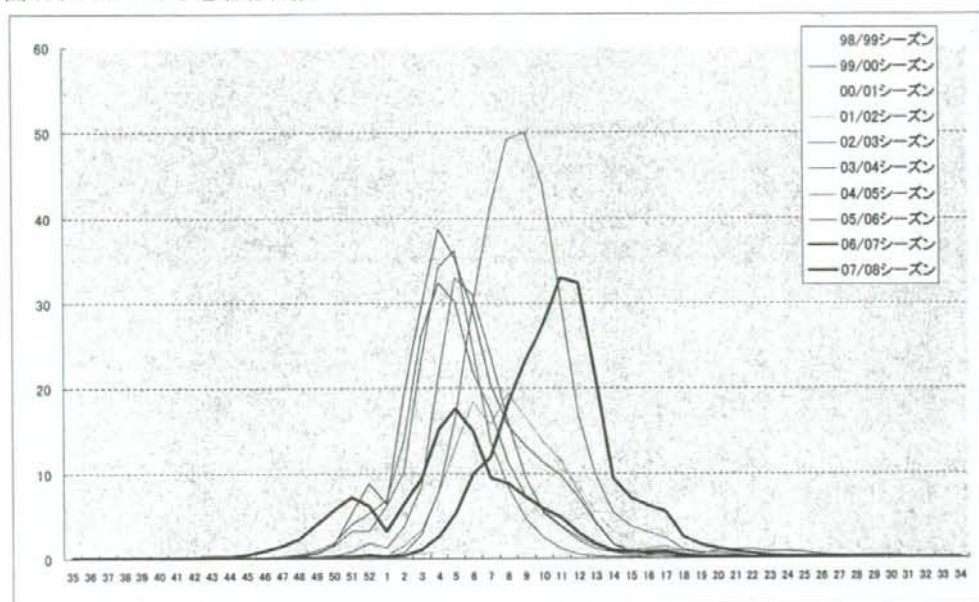
表 2. 発熱から異常行動発現までの日数

発現日	重度		走り出し、飛び降りのみ	
	n	%	n	%
発熱後 1 日以内	25	33.33	14	35
2 日目	37	49.33	19	47.5
3 日目	11	14.67	6	15
4 日目	2	2.67	1	2.5
	75	100	40	100

表 3. 分析対象データ(軽度)

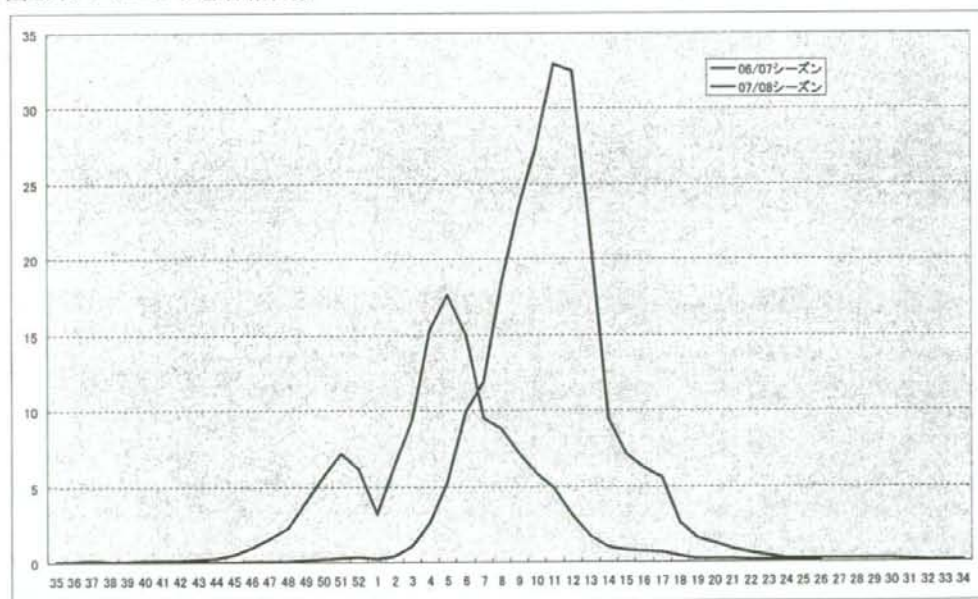
報告数	674			
重度	88	除外	対象	
軽度	532			
	日時不明	7	12	520
	高齢者(31歳以上)	5		
不明	54			

図 1.インフルエンザ患者報告数



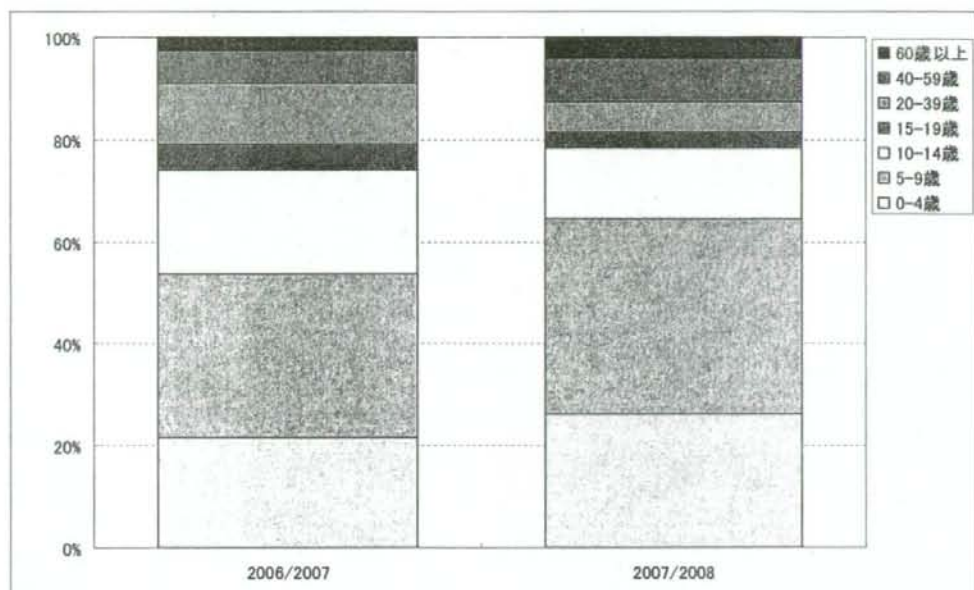
出典:発生動向調査

図 2.インフルエンザ患者報告数



出典:発生動向調査

図 3.年齢別インフルエンザ患者報告数



出典:発生動向調査

図 4.型別インフルエンザウイルス分離の検出報告数

週別型別インフルエンザウイルス分離・検出報告数の推移、2006/07 & 2007/08シーズン
(病原微生物検出情報：2008年7月1日 作成)

* 各都道府県市の地方衛生研究所からの分離/検出報告を因に示した

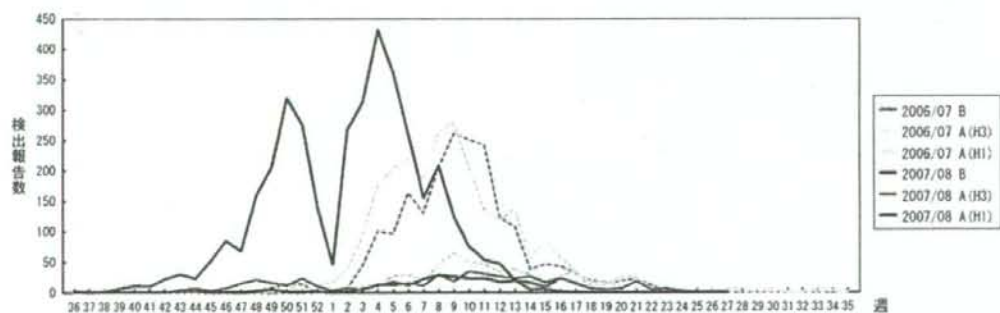


図 5.異常行動(重度)の発熱週と発生動向調査

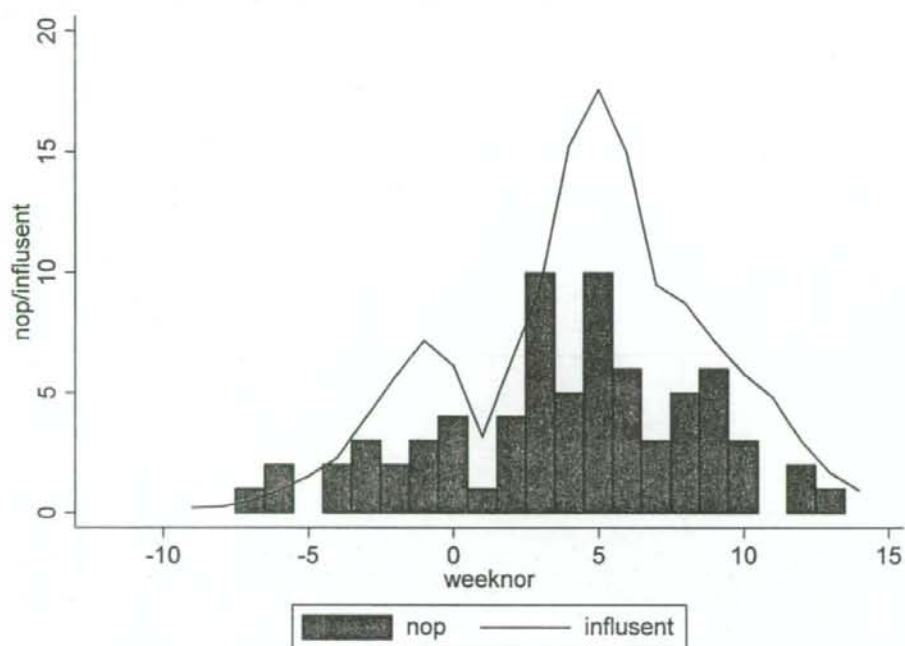
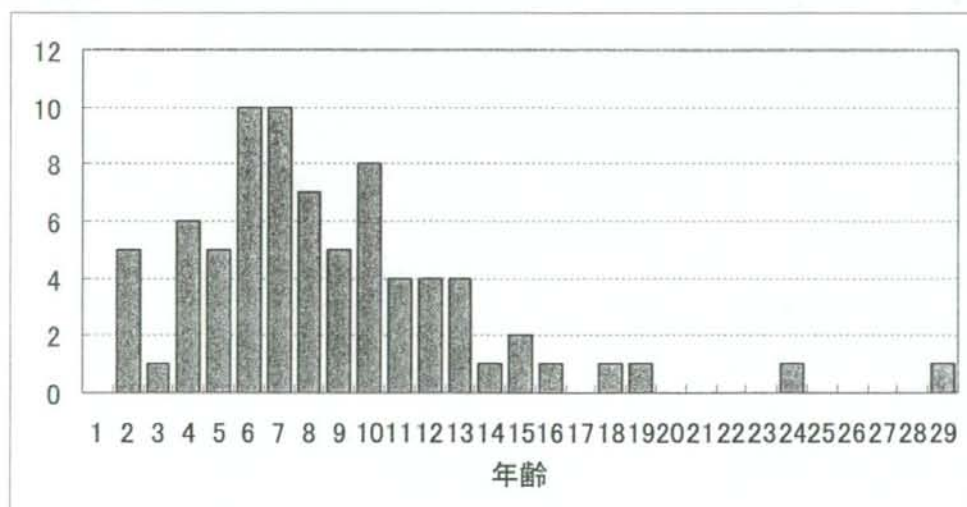


図 6. 患者の年齢 n=77



平均値 8.66 中央値 8

図7.患者の年齢と性別 n=77

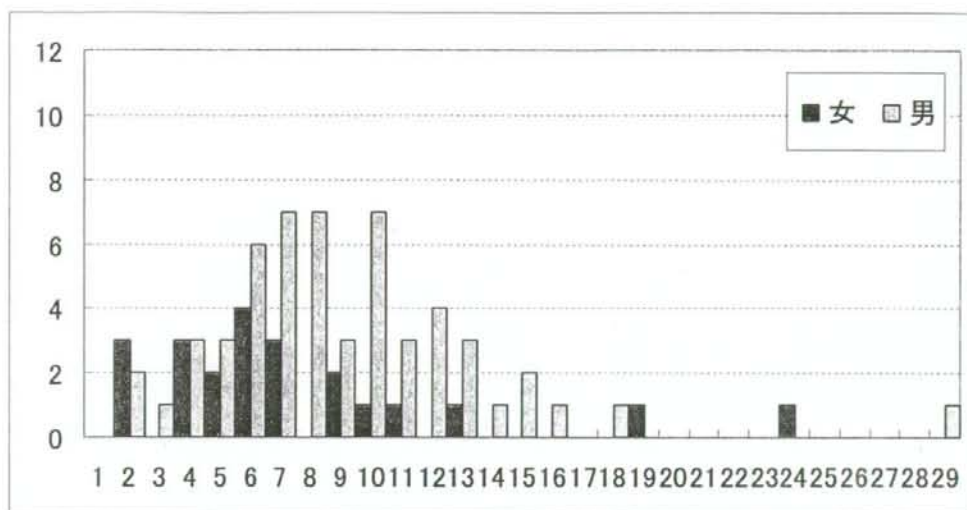
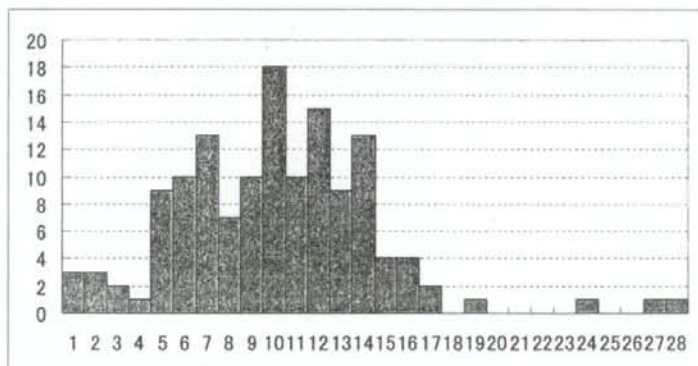


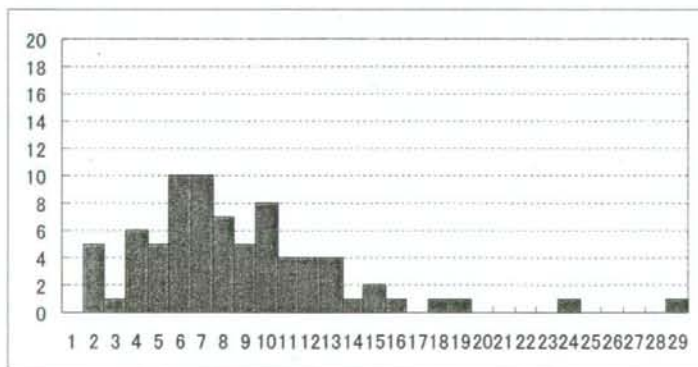
図8.昨シーズンとの比較

2006/2007



平均値 10.11 中央値 10

2007/2008



平均値 8.66 中央値 8

図 9. 昨シーズンとの比較

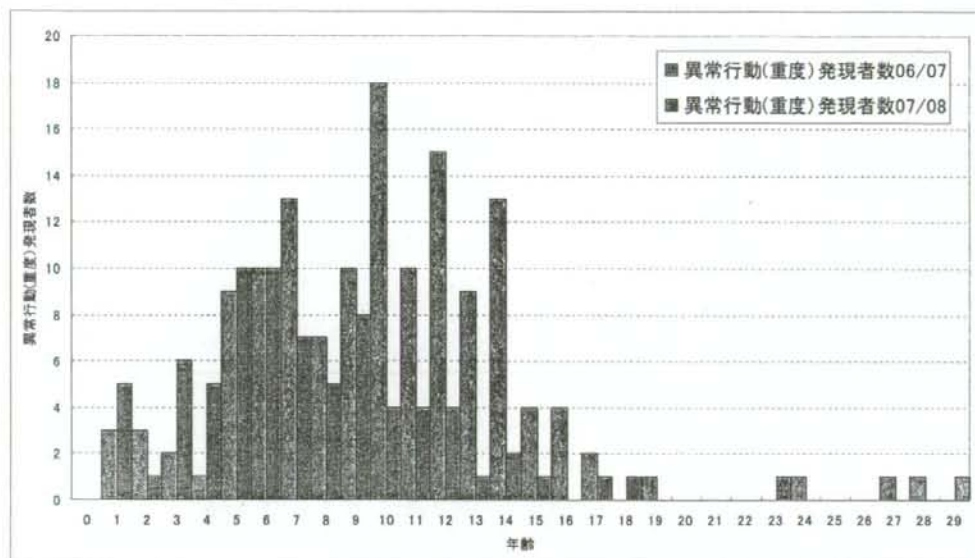
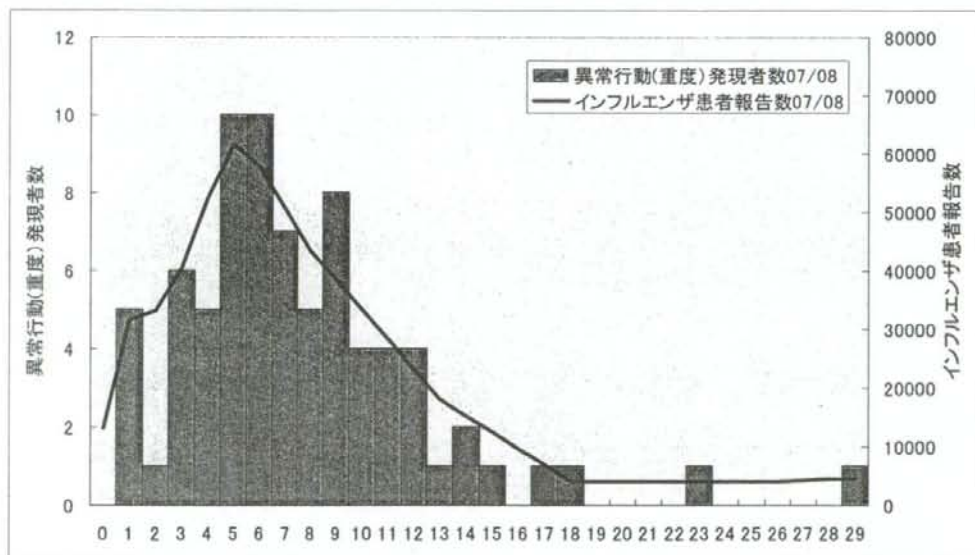
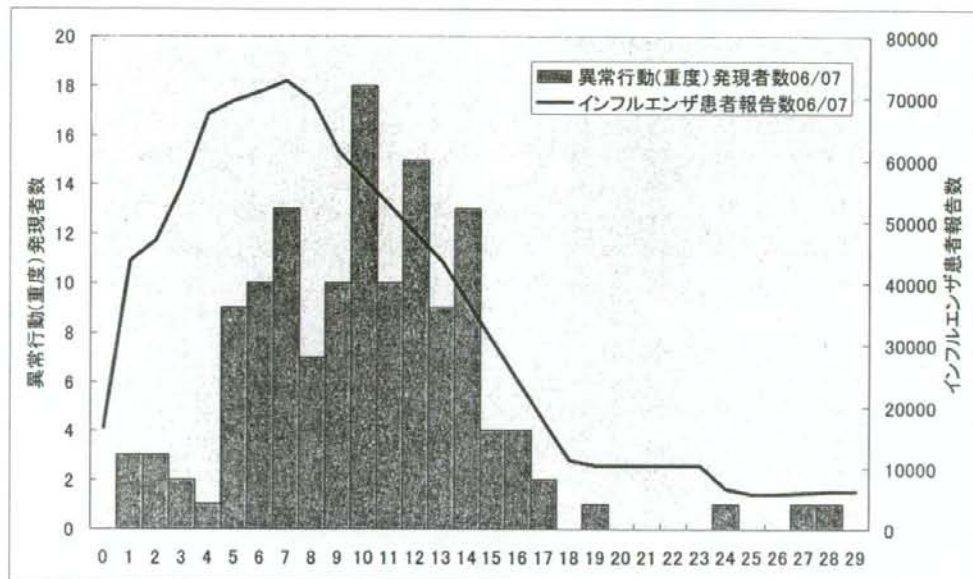


図 10. 異常行動(重度)発現者数とインフルエンザ患者報告数 2007/2008 シーズン



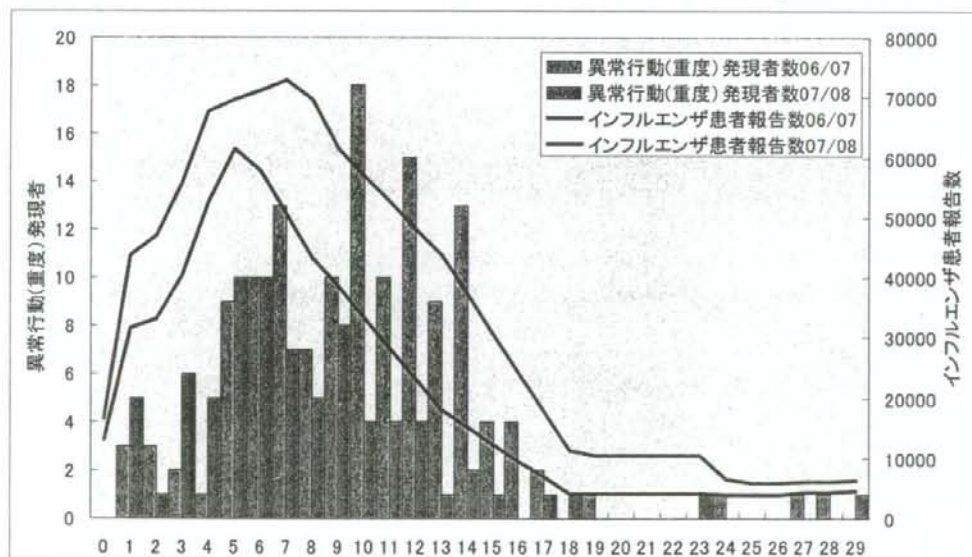
出典: 発生動向調査

図 11.異常行動(重度)発現者数とインフルエンザ患者報告数 2006/2007 シーズン



出典:発生動向調査

図 12.異常行動(重度)発現者数とインフルエンザ患者報告数昨シーズンとの比較



出典:発生動向調査

図 13.患者の性別 n=77

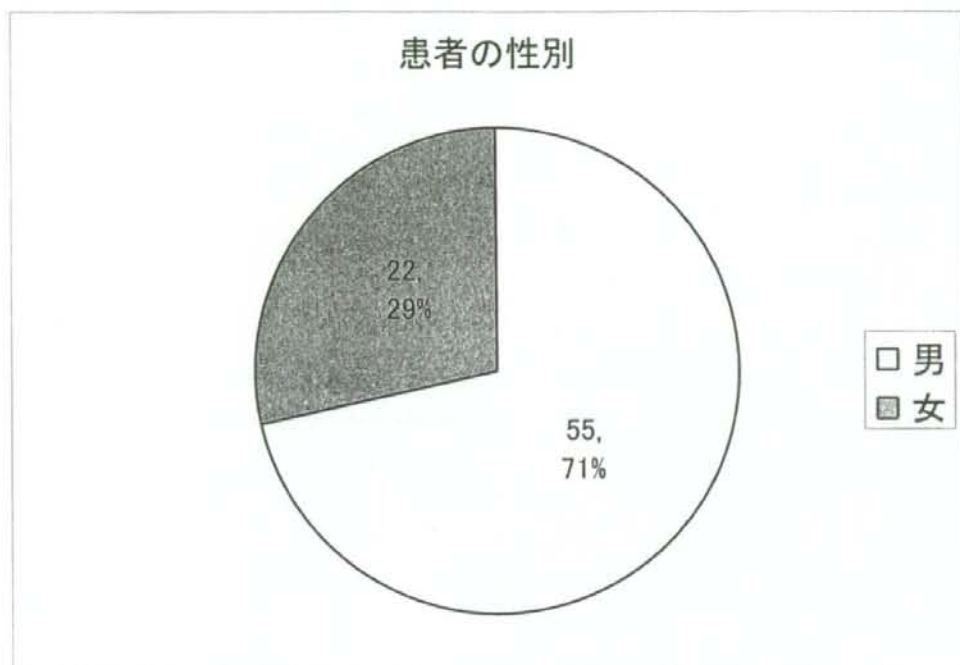
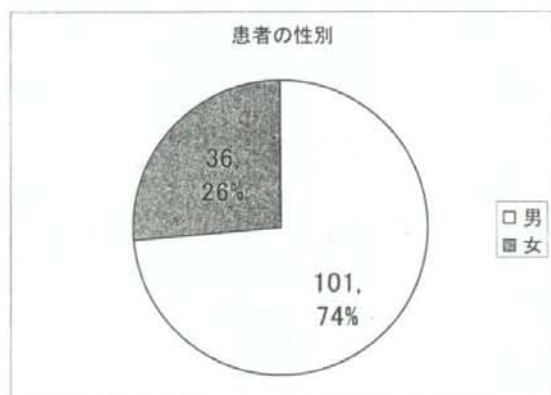


図 14.昨シーズンとの比較

2006/2007



2007/2008

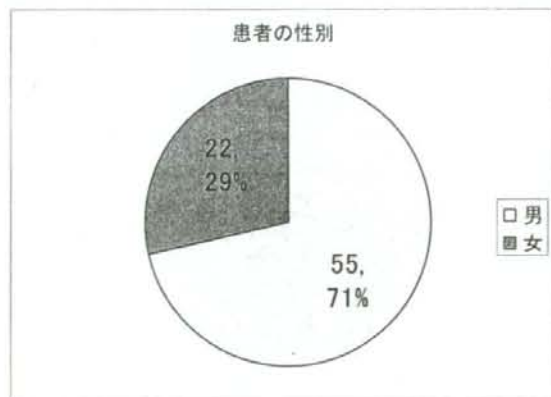
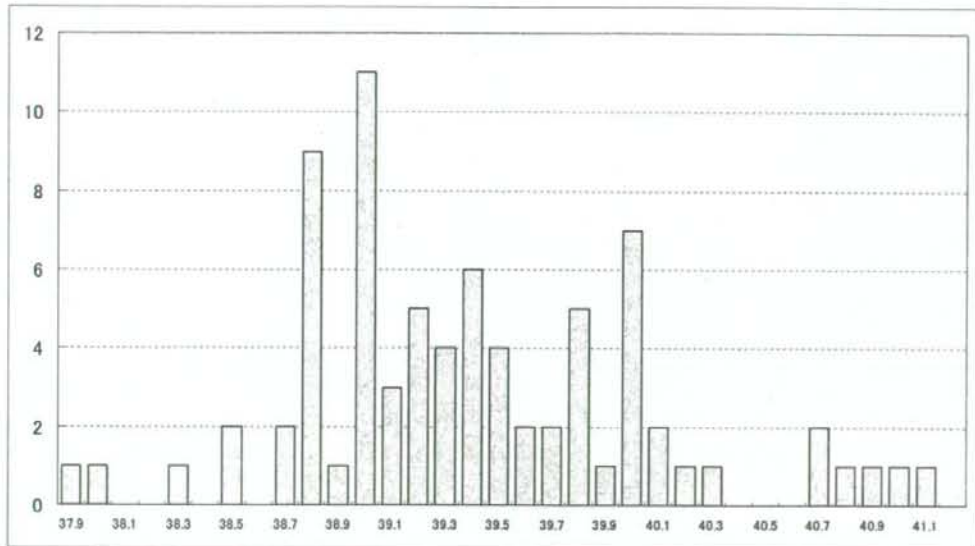


図 15.最高体温 n=77



平均値 39.41 中央値 39.3

図 16.インフルエンザ迅速診断キットの実施の有無 n=77

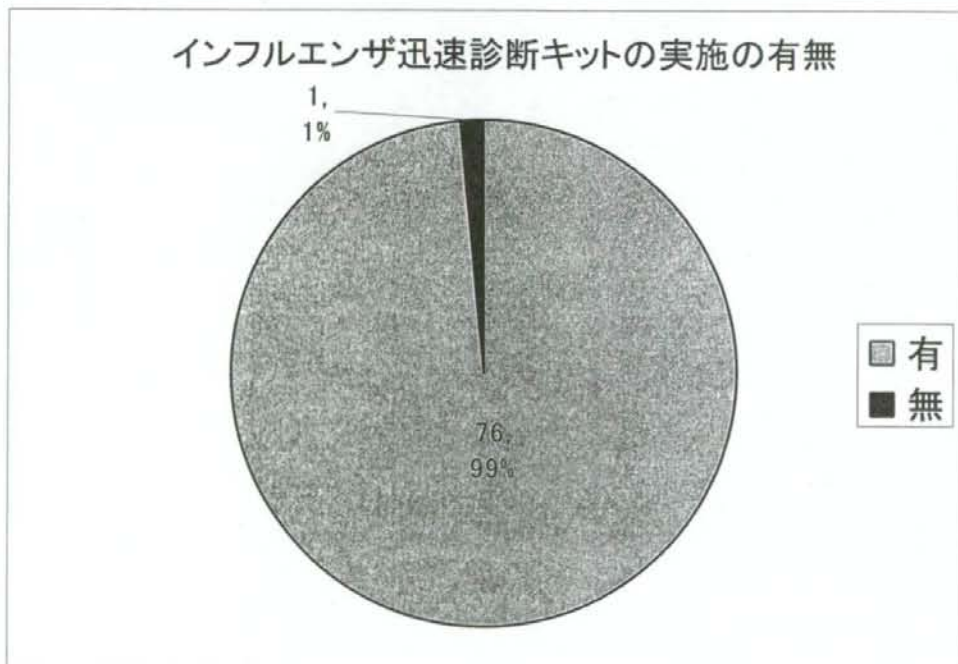


図 17.迅速診断キットによる検査結果 n=76

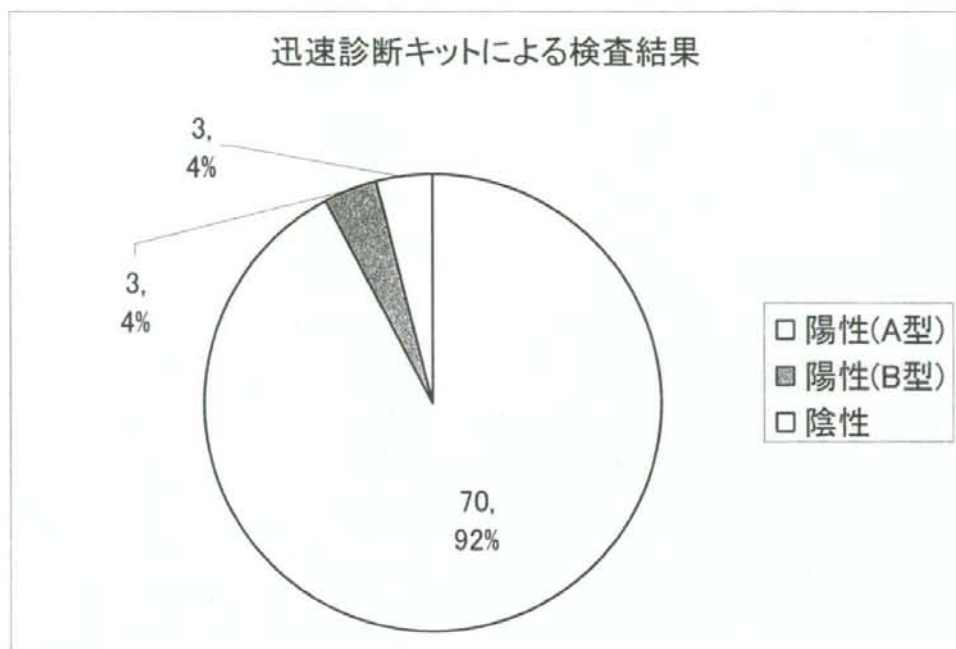


図 18.罹患前半年間の予防接種歴 n=77

